

平成17年  
5月号

250円

# やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



妻として

挫折から学んだこと2(落とし穴)

樋口めぐみさんへのインタビュー

子育て

名前が記されている唯一の女性

購読者からのメッセージ

アスマ祖父をなだめる

「慈しみ深く、潔白という聖マルヤム様(聖母マリア)のイメージが人々の理性に存在し、また純潔と高潔さのシンボルとしての母マルヤム様(聖母マリア)も、私たちアナトリアの人々の心に存在しています。この愛情があるからこそ、エフエスに彼女の家があると認めているように、墓もそこにあることを私たちは想像し、これが絶対的な事実であることを強く望みます。彼女の名前を、私たちは自分の娘たちに与えます。そして「私たちの母」として、彼女を「母マルヤム様(聖母マリア)」と呼ぶのです。」p.22



先ごろローマ法王ヨハネ・パウロ2世が死去されました。長らく持病を患いながらも精力的に各国を訪問し、異なる宗教間の対話にも尽力された方というイメージが強くありましたので、安らかに眠ってくださいと祈らずにはいられませんでした。

ちょうど同じころ、預言者イーサー（イエス）様の母マルヤム（マリア）様について考えていました。マルヤム様はそれぞれの宗教、宗派によって描かれ方や捉えられ方が多少異なりますが、キリスト教とイスラームを近づける共通の存在のひとつであり、クルアーンの中で唯一その名前が言及されている女性です。また母として女性として、そして信仰者として、その生き方は広く多くの人々が学び、共有していく価値を持っているお方の一人です。

たとえばマルヤム様の美德のひとつである「純潔」をとっても、現代の日本では古臭い価値観の一言で片付けられそうですが、自分自身の妻や娘にそれを求める人は多いでしょう。大切な倫理だどこかで知りながら自分に都合よく使い分け、それに疑問ももたない空気ができあがっているかのようなのですが、そのことが原因で自分自身がいかに不幸を味わうか、家族や社会全体、未来の世界にどのような影響が波及していくのか考えることを放棄している結果なのだと思います。

マルヤム様の生き方、試練への対処など、本文での紹介をお読みください。



編集部より	2
熟慮すること	3
カルブ（心・心臓）(Qalb) -2	5
祈りのある毎日へ	6
妻として	7
挫折から学んだこと②(落とし穴)	8
樋口めぐみさんへのインタビュー	13
言葉がもたらす災いと純潔さ	14
子育て	16
近い将来についての言及	17
隕石のメッセージ	18
りんごのポロポロケーキ	19
復活（4月号からのつづき）	20
ある日の出来事	21
名前が記されている唯一の女性	23
リュックの先生 東へ西へ	25
アンネ。。。より	27
購読者からのメッセージ	27
アスマ祖父をなだめる	28





常に分別を働かせなさい。そうすれば損失や失敗がもたらす遺憾や後悔の念が生じるのを防ぐことができます。何らかの計画をたて着手したものの、状況をきちんと慎重に見極められなかったために自らの行動を後悔したり運命を呪ったりする人のいかに多いことか。そういった人たちは熟考が足りなかったことと運命を非難するという二重の間違いを犯しているのです。

あるプロジェクトのゴールがどんなに素晴らしかろうと、それを達成するためにはいつも十分な予防措置を講じる必要があります。現実的な行動計画をたて、予想される長所と短所を注意深く比較しないのであれば、それはあなたが本気でないか全くの愚か者であるかのどちらかです。そういった人々の行動は何もしないよりもよほど害があります。

ゴールに達するには熟慮と安全策を講じることが重要な決め手となります。最終的に失敗をもたらしたり他人の非難を招きかねない事柄に対して、注意を怠ったり無関心でいるのは重大な過失です。賢明な人であればあらゆる欠点や問題点を想定し、実際に発生した場合の解決法や適切な対処法を把握しておくでしょう。“家に押し入られる前に泥棒を捕まえたほうがまし”と昔からの言い習わしにある通りです。

きちんとした企画立案を行い、安全策を講じた上で一つ一つの責務に取り掛かりなさい。それが物的・知的側面でメリットを生み出すものではなく、また付加価値を与えるものでないとしてもこの段階を踏まえるよう気を配りなさい。適切な予防措置がとられていないプロジェクトは取るに足らない無意味なものに過ぎず、それに気を取られてしまっている人の愚かさや幼稚さを露呈することになっているのです。

大変厳しい試練や逆境に直面した後に勝ち得た成功を通じて、その人自身に備わる美德や価値が明らかにされます。悪条件にあつて成功を成し遂げるのは、現実的なプランを立案しそれに忠実に従うことに負うところが大きいのです。つまり人の価値や美德はもたらされた成功に比例しますし、その成功は冒険的な試みに踏み出す前にいかほどの熟慮をなしたかに比例するのです。

整然と首尾一貫して責務を果たしていくには、最初に立てる計画や方策と、ライバルに翻弄されない能力という二点にかかっています。専心して物事に取り組んでいくには先見の明に優れていることと熟慮が必要なのです。すったもんだし雑音をたてながら始動する人々の多くが二段階目にさえ進まないうちにライバルや敵に足をすくわれ遅れをとってしまうのです。彼らは気がついたときには、以前から警告を受けていた害悪やイライラの種に囲まれてしまっています。それもこれも事前の適切な準備を怠ったからなのです。それが唯一の負の結果であればいいのですが・・・彼らの後に従っている人々への影響も考えてみてください。失敗が原因で希望は失われ、麻痺状態や無気力に覆われるのです。

思慮深さは、及び腰であつたり引っ込み思案であることとは違います。適当な準備や計画を伴わない行動が勇敢でも大胆でもないことと同じです。極端に注意深すぎるのも何らかの損害を及ぼすかもしれませんが、そういった損害は埋め合わせができるものです。一方で慎重さに欠けることこそ勇敢だと考えている

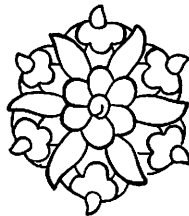
ような人の軽率で不注意な行動は非常に危険で物騒といわざるを得ません。

多くの悪い習慣と同様、人々を欺いて支配するテクニックを使い大衆を操作しようとすることは外国からの贈り物です。しかし私たちはそういったものを拒否します。そうではなく、私たちは遅くとも平和的な道を選びます。たとえそれがより多くの悲しみを伴う長い苦難の道であったとしてもです。

創造主を前にしたとき、あなたの真の評価は活動力と目的の偉大さによって測られます。これら二つの要素がはっきりと現れるのが、他者の成功のためとあらば自らの快適さや欲求も進んで犠牲にできるかという点です。自分自身の個人的な成功が目前に迫っているときに己の欲求を抑え、叫びだしたくなる気持ちさえもこらえて、社会の幸福のためであれば己の尊厳も踏みにじることに偉大な犠牲がありえるでしょうか。

戦で勝利を挙げた軍があったとしてその勇敢さだけに着目し、成功が戦略的計画によってもたらされた事実を無視するのは愚かというものでしょう。同様に、無鉄砲さが成功の秘訣だと解釈して、慎重に計画をたてたり前もってよく考えたりすることをないがしろにするのはばかっています。

ゴールを確実にするために努力し、また実現するために予防策を張ることは、全能のお方からの援助の誘因となります。これはひとつの真実に備わる二つの側面を表しています。プロジェクトの準備段階もしくは始動の時点で誤りがあれば、その援助は訪れません。そうなれば成功も手に入りません。旅路を安全かつ着実に前進していくのは、洞察力を持ち続け油断を怠らない者にのみ可能なのです。幸運な者とはこの事実を知っている者のことです。





## カルブ（心・心臓）(Qalb) -2

信仰はカルブの生命であり、崇拜はカルブの血管を流れる血液です。熟考（タファックル）や自己管理、自己批判はカルブの永続のための基盤です。信仰しない人のカルブは死んでいます。信仰していても崇拜していない人のカルブは瀕死状態です。信仰していても崇拜もしていても、内省や自己管理、自己批判のできていない人のカルブは危険な精神的な危機や病気にさらされています。

第一のグループの人々は胸の中に「ポンプ」は持っていますが、「カルブ」を持っているとは言えません。第二のグループの人々は、憶測や疑念という曇って霧がかかった大気の中を、アッラーから遠く離れたところにおいて、目的地に着くことはできません。第三のグループの人々は、目的地へと向かっていくらかの旅をしてきましたが、まだゴールに辿り着いていないために危険にさらされています。彼らはよろめきもがきながらアッラーの道を進み、失敗と成功のサイクルを経験し、登りきることができないのに「丘」を登ろうとして人生を費やしています。

一方で、固い信仰を持ち、まるでアッラーが見えているように、また、アッラーが自分を見ているということを実感しながら生きている人々は、完全に安全な状態でアッラーの保護の下にいます。彼らは被創造物を洞察をもって研究し、すべてのものの性質を見通し、アッラーの光を通して現実を理解し、冷静にそして自己制御の下に振舞います。彼らはアッラーに対する畏れや不安に震え、最終目的地に焦がれて震えます。また、アッラーに喜んでもらえることを求めアッラーへの愛を示せるような方法で生きていくことによって、アッラーのお喜びを得ようとします。かわりに、アッラーは彼らを愛してくださり、他の信仰する人々が彼らを愛するようにしてくれます。彼らは人類にもジンにも愛され尊敬され、どこにいても暖かい歓迎を受けます。

預言者ユースフ（ジョセフ）（彼の上に平安あれ）は聖クルアーンのユースフ章の主人公ですが、かれはこの章の中で完璧な善良さと深い信仰を持った人として五回述べられています。創造主と被創造物を含むすべての存在は、味方であっても敵であっても、地であっても天であっても、彼の厳しい自己制御と自己管理について証言しました。『かれが成年に達した頃、われは識見と知識とをかれに授けた。このようにわれは正しい行いをする者に報いる。（聖クルアーン 12：22）』ここでアッラーは預言者ユースフは成年に達したときにはすでに完璧な善良さ自己コントロールを持っていたことを述べられています。彼がエジプトで捕らえられていたときには、良い人も悪い人もすべての囚人が彼の心の深さと精神の純粋さに気付き、自分たちの問題を彼に解決してもらおうよう求めていました。『わたしたちにその（夢などの）意味を解いてください。御見かけしたところ、あなたは善い行いをされる方です。（12：36）』ユースフは彼が直面したすべての試練を乗り越え、友人であっても敵であっても、すべての人の心に残りました。

また、政府の高官に任命されたときにも彼は変わらなかったのも、アッラーは彼を完璧な善良さを持つ人、善良の完璧な体現として述べられました。『こうしてわれは、この国においてユースフに権力を授けた。それでかれは、意のままにエジプトの国中を何時でも何処にでも住むことが出来た。われは欲するものに慈悲を施す。また善行をなす者への報奨を虚しくしない。（12：56）』ユースフのことを常に羨ましく思っていた兄弟は、エジプトの宮殿にいるその慈悲深い大臣が彼だということに気付く前に、彼の善良さと誠実さを知り、次のように言いました。『かれには大変年老いた父親があります。それでかれの代わりに、わたしたちの1人を拘留して下さい。御見うけしたところ、あなた（ユースフ）は本当に善い行いをなさる方でございます。（12：78）』

最後に、完璧に成熟した人として、また完全な精神的満足を得て、預言者ユースフは自身の上にあったアッラーの祝福について証言しています。『アッラーは確かにわたしたちに恵み深くあられる。本当に主を畏れ、堅忍であるならば、アッラーは決して善行の徒への報奨を、虚しくなされない。(12:90)』

これほど健全なカルブを持った人が道を逸れたりアッラーの祝福を奪われることになるなどは、考えられないことです。アッラーの至高の王座が宇宙に対して持つのと同じ意味を、このようなカルブはその持ち主に対して持ち、また、アッラーが全面的な評価をそこに見られる磨かれた鏡のようでもあります。このような鏡は捨てたり壊したりできるものではありません。それは人間の本質と精神であり、アッラーによって価値をもたされたものだからです。

ルーミーは次のこのことについて次のような詩をよんでいます。

アッラーは言われる。私はカルブを評価する。

水と泥からできた姿かたちではなく。

あなたは言う。私は私の中にカルブを持っている。だが一方、

カルブは下ではなくアッラーの王座の上にある。

祈りのある毎日へ



おお、万有の主よ

おお、万有の神よ

おお、万物の創造者よ

おお、万物を超越する者よ

おお、万有の最初の者よ

おお、万有の最後の者よ

おお、全知者よ

おお、全能者よ

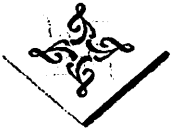
おお、よろずのものを巧みに造る者よ

おお、よろずのものは消滅し、かれのみが永遠であられるお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎から

お助け下さい。<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）には、祈願（きがん）、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。

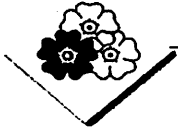


私が女性というとハディージャが思い浮かびます。ハディージャは預言者ムハンマドの妻でした。そして最初のムスリムとしても知られています。ハディージャは困難と直面する預言者ムハンマドを生涯援助したとあります。このハディージャの姿は私達女性が見習うべき姿なのではないかと私は思います。結婚している立場として考えると、主人を支えるのは妻の大きな仕事であって、結婚している以上夫婦ともに助けあうことが当然です。預言者でさえ妻の援助に助けられたのですから、私達女性が精神的に夫を守ることは当然の義務のように感じられます。

日本では国際結婚がきっかけで信仰にいたる女性が多く存在すると思いますが、結婚した後に問題が起こることがあります。イスラーム生活が、それなりの義務がありますし、避けなければならないことがあります。これは外からイスラームを見たときに、しばしば「厳しい」という印象を与えるものです。しかし実際ムスリムにとっては決して厳しいものではないのです。例えば漢字のテストで合格ラインが90点以上であるとすれば、89点では不合格になってしまうので、90点以上の点数が取れるように一生懸命に漢字の練習をします。簡単な例にするとこういうことなのです。ある目標のためにがんばっているというだけのことなのです。自分が傲慢にならないように気をつけたり、自分勝手にならないように気をつけたり、人に優しくできるように努力したり、不正をしないように注意をはらったり、そういったことなのです。

結婚の後に問題が起こるとはどういうことかと考えると、やはり気持ちと実践とが不安定であるということだと私は思います。どうして日々お祈りを続けなければならないのか？どうしてクルアーンを読まなければならないのか？どうして自分がこういった行為をするのかという意味、意義、理由、を理解すれば決して厳しいものでも、辛いものでもないことが分かります。意味、意義、理由といってもただ神がそう命じているから、ムスリムになったからという回答では納得できないかもしれません。それで神とはどういった存在か？という質問につながっていくと思います。そうすれば神という存在について考える必要があります。また、自分の身近にいるムスリムからイスラームを知るという事実があります。これも当然のことです。以前私が聞いた、信仰をもったそのときが罪のない生まれたての赤ちゃんのようになるという言葉がありました。その時は「へえ。」と軽い気持ちでしたが、本当にそうだなと今実感しています。不正をしない、物を盗まない、うそをつかない、などなど道徳的に決してしてはいけないようなことを「しない。」と約束したようなそんな気持ちで信仰を選んだと思います。まさに分別のある人間に生まれ変わったかのようなのでした。その為、仮にうそをつけば、それは罪になるという意識が生まれ、うそはつかなくなります。うそは人の信用をなくすものですから決してしてはいけない行為だと実感したのは信仰をもってからでした。前には気づかなかったあるいは罪ではないと軽く考えていたことはやっときちんと分別がつけられるようになりました。こういった分別は人間をつくる基本ですからとても重要なことです。

神と約束することで自分を守ることができると思います。



## 挫折から学んだこと②(落とし穴)

ハニーファ富岡貴子

前号でお話したように、私は修道院を出ることを決意し、帰国の途についた。悲しかった。8年間思いつづけてきた夢がたったの2ヶ月で崩れ去ってしまった。

帰りの飛行機の中で“どんな顔して日本に帰ればいいのか？この先どうやって生きていったらいいのか？このまま飛行機が落ちてしまえばいいのに”と思い、絶望のうちにあった。そんなとき美空ひばりの「川の流れるように」が聞こえてきた。私はその歌を聞くのが初めてだった。ちょうど美空ひばりが亡くなったばかりで追悼の意味で流していたのかもしれない。「ああ 川の流れるように おだやかに この身を まかせていたい」その歌詞に私は慰められた。その歌から安らぎを感じることができた。そうだ、全てを神に任せよう、と思った。

しかし、帰国してしばらくはだれとも会いたくなかった。何も話したくなかった。外に出るのが恐かった。ずっと自分の部屋に閉じこもっていた。自分の殻に閉じこもっている時、私は人からどう思われるか、人の目をいつも気にしていた。逆にいえばそれは見栄やプライド、自分がよく思われたいという気持ちが根底にあるからであり、それこそまさに自我(我執)にとらわれている状態でもあったのだ。1ヶ月ぐらいそんな状態が続き、母が部屋に入ってきて「いつまで閉じこもっているつもり？今すぐ教会の神父様に電話して、帰ってきたことを報告しなさい」と言った。私もこのままではいけないとわかってはいたが、一歩踏み出す勇気がなかった。教会に報告することを私は一番恐れていた。盛大に送別会を開いてもらって送り出されたのに、いったいどんな顔して教会に戻ればよいのだろう。きっと皆に白い眼で見られるだろうと思っていた。思い切って神父様に電話した。意

外にも「帰ってきたの？それじゃまた盛大に歓迎しなきゃ。ちょうどいい。夏の日曜学校のキャンプに人手が足りないから手伝ってくれ」という返事、神父様は何も聞かずに私を受け入れてくれた。電話の声から傷ついている私の心を悟ったのだろう。私はこの神父様の思いやりが涙の溢れるほどありがたかった。母はクリスチャンではなかったが、神父に報告したことがきっかけで、私は自分の殻を破って外に出ることができたのだ。自我のとらわれから解放されると、心は自由になる。母の適切なアドバイスに感謝している。もしかしたらすでに母は神父と話をしていたのかも知れないが…。そして神父様の計らいで教会にも顔を出すことができたし、また活動の場を与えられ、しだいに明るさを取り戻し、新たな希望が生まれてきた。

神父様の次に電話したのは大学時代の親友だった。「うちに泊まりにおいで」と言ってくれたので、彼女の所に行った。私は何も話したくなかったし、彼女も何も聞かなかった。無言のうちに時は過ぎた。しかし、このときほど私は友達のありがたさを感じたことはない。自分が最も苦しい時、ただ黙ってそばにいてくれるだけでいい。今まで気付かなかったが、友情のありがたさを始めて実感した。

とても勇気がいることだったが、少しずつ外に出て行くことができるようになった。そしてもう一つの夢であった教職への道が開かれた。教職は私にとって天職だと感じた。

誰から聞いたのか、生徒からマザーテレサの修道会についての話を聞かれたが、施設に收容されている患者さんとの交流などは話したが、修道院での出来事については話せなかった。私の心の傷は完全には癒えていなかったもので、話をするにはとても辛く勇気のいることだったが、卒業生の最後の授業の時、「マイナスはプラスに変えること



ができる（心の持ちようで、その出来事をマイナスに受けとめることもできればプラスに受けとめることもできる）」ということを伝えようと、初めて自分の挫折の体験（修道院を出てから）と立ち直るまでの心の変遷を話した。途中やはり涙声になってしまった。生徒全員が顔をあげ、真剣に聞いてくれた。授業が終わって教室を出ると、一人の生徒が追いかけてきた。目に涙を浮かべて「これまでの授業の中で今の授業が一番よかったです。私は今日先生が話してくれたことを一生忘れません。先生と出会えたことを嬉しく思います」とお辞儀をしていった。その後何人かの卒業生から同じような手紙をもらった。伝えなかったメッセージが生徒の心に届いてくれたことが純粹に嬉しかった。話してよかったと思った。

私は挫折によって本当に大切なものに気が付いたのだ。もし私が順調なままだったら、自分の自我にも気付かず、今よりももっと自信家で傲慢で、嫌な人間になっていただろう。挫折によって自分の無力さ、惨めさ、傲慢さに気付かせられた。これらに気付くことは信仰の上でも重要なポイントでもある。そして、人の思いやり、友情のありがたさ、人の痛みにも敏感になり、些細なことにも感謝するようになった。アッラーは私を愛し、私を成長させるためにこの挫折を与えてくれたのだと今は感謝している。

私は自分が傲慢であることに気付いているが、なかなかそれをなおすことができず、自己嫌悪になることがある。

あるとき主人に尋ねてみた。「私のどこが好きになったの？」主人曰く、「純粹なところ」。こんな傲慢で自己中心的な私のいったいどこが純粹なのかと聞くと、「あなたは自分に正直でしょ」と言う。

そうか。それを魅力と感じる人もいるのか。自分を正直に見つめ、自我に気付くようになったのも、こういう体験があったからかもしれない。

「自分たちのために善いことを、あなたがたは嫌うかもしれない。また自分のために悪いことを

好むかもしれない。あなたがたは知らないが、アッラーは知っておられる。」(雌牛章 2/216)

次のような詩があるので紹介しよう。

「苦しみを担う者の信じるどころ」

大きなことを成しとげるために 力を与えてほしいと神に求めたのに、謙遜を学ぶようにと弱さを授かった。

より偉大なことができるように 健康を求めたのに、より良きことができるようにと 病弱を与えられた。

幸せになろうとして 富を求めたのに、賢明であるようにと 貧困を授かった。

世の人々の賞賛を得ようとして 成功を求めたのに、得意にならないようにと 失敗を授かった。

人生を享楽しようと あらゆるものを求めたのに、あらゆることを喜べるようにと 生命を授かった。

求めたものは一つとして与えられなかったが、願いは全て聞き届けられた。神の意にそわぬものであるにもかかわらず、心の中の言い表せないものは すべて叶えられた。

私はあらゆる人の中で もっとも豊かに祝福されたのだ。(J・ロジャー・ルーシー)

アッラーに信頼していれば必ず導きがある。心のアンテナを立てていれば、常にアッラーからのメッセージをキャッチすることができる。

「かれがわれに祈る時はその嘆願の祈りに答える」(雌牛章 2/186)

「本当に困難と共に、安楽はあり、本当に困難と共に、安楽はある。」(胸を広げる章 94/5-6)

たとえばこういうことはないだろうか？私の場合、よくこんなことがある。

何か解決できない問題があるとき、タイミン

グよく解決のヒントとなる言葉に出会うことがある。それはある人との出会いだったり、友人とのたわいもない会話から、あるいはたまたま読んでいた本や雑誌や新聞から、TVドラマを見ていて、メールなどで人の言葉を通して等々、様々な機会からアッラーは突破口となるものを用意してくださる。また、落ち込んでいたり、思い悩んだりしている時に、川の流れや花や木の葉の成長から、一匹の蟻や鳥などの動き(知恵)などから慰められたり励まされたりすることもある。

毎日の出来事、出会う人、出会う言葉は、アッラーが私にその人との出会い、そのことばと出会う必要があり、その出来事を体験する必要があるから出会うせてくださっているのだと感じている。

時には辛く悲しい出来事、厳しい言葉に出会うこともあるが、それはアッラーが今の私に必要なことで、何かを気付かせるためにそれを私に与えているのだ。

最近、アッラーの愛を感じ、感謝に涙することがあった。

あるムスリマと話していた時、“アッラーに近づくには人間の側からの努力が必要だ”ということについて、私が「でも私の場合、私が努力したからではなく、アッラーの方が私の心を開いて導いてくださったのだと思う。アッラーからのお導きがなければ、努力しようという気にもならないのではないか。・・・私が自分の自我(傲慢さなど)に気付き、罪を悔悟したくなるのも、アッラーが気付かせてそういう気持ちにさせてくれるからであって、私の努力によってではない」と言った。すると彼女は「それは違う。自分では努力しているつもりはないかもしれないけど、ハニーファさんは常にアッラーを求めて自分の自我と闘っている。それをアッラーがお喜びになって、ハニーファさんにいろいろなことを気付かせてくれているのだ」そうなのだろうか。そのことばを思い出すたびにアッラーへの愛と感謝が溢れて眼が熱くな

る。最近、礼拝に愛がこもっていないと感じていたが、久々に感謝に溢れる思いで礼拝することができた。

「本当にわれは人間を創った。そしてその魂が囁くことも知っている。われは(人間の)頸動脈よりも人間に近いのである。」(カーフ章 50/16)

「私は、私を想うしもべの想念の中におり、そして、また、私の名を唱えるしもべと共にいるであろう」(ハディース)

アッラーは求めれば求めるほどより近くにいて下さる。アッラーを想えば想うほど、アッラーはその想いの中にいる。私の悲しみを知り、私の心の叫びを聞き、私の心の内に入ってきて癒してくださる。先が見えずにもがいている時、最も苦しい時、悲しい時、アッラーだけにより頼み、最も助けを必要としている時、一見アッラーは沈黙して何も応えてくれないと思うような時もあるが、実はそのときこそ、アッラーは最も近くにいて共にいてくださるのだ。気が付かないだけなのだ。

私が挫折感に打ちひしがれていた時、また最も辛かった時、心なぐさめられた詩を紹介する。

「あしあと」

ある夜、わたしは夢を見た。わたしは、主とともに、なぎさを歩いていた。暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。どの光景にも、砂の上にふたりのあしあとが残されていた。一つはわたしのあしあと、もう一つは主のあしあとであった。

これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。そこには一つのあしあとしかなかった。わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時だった。このことがいつもわたしの心を乱していたので、わたしはその悩みについて主にお尋ねした。

「主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、あなたは、すべての道において、わたしとともに歩み、わたしと語り合ってくださいと約束さ

れました。それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、ひとりのあしあとしかなかったのです。いちばんあなたを必要としたときに、あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、わたしにはわかりません。」

主は、ささやかれた。「わたしの大切な子よ。わたしはあなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に。あしあとがひとつだったとき、わたしはあなたを背負って歩いていた。」(マーガレット・F・パワーズ)

私は主人の仕事の関係でもうすぐ日本を離れる。しばらく文章を書くことはできなくなるだろう。思えば私はずっと自分自身の心に向かって文章を書いていたようだ。今度いつこの紙面上に登場するかはインシャアッラーだが、アッラーに近づくための成長をアッラーが与えてくださいますように。

アッラーの御加護と祝福が皆様の上に豊かにありますように。

\*\*\*\*\*

・本当に困難と共に、安楽はあり、本当に困難と共に、安楽はある。(胸を広げる章 94/5-6)

・アッラーを念ずれば、お前は眼の前にアッラーを見ることができる。繁栄のおりにもアッラーに近づこうとすればアッラーはお前がいまだに苦境にあると認めて下さるであろう。いいか、お前にふりかかったことはお前を苦しめるためのものではなかったし、お前を苦しめたことはお前にふりかかるためのものでもなかったのだ。勝利は忍耐と共にあり、安堵は悩みと共に、楽は苦と共にあることを肝に銘じなければならない。(「40のハディース」第19の伝承)

・地上において起こる災厄も、またかれらの身の上に下るものも、一つとしてわれがそれを授ける前に、書冊の中に記されないものはない。それはアッラーにおいては、容易な業である。それ

はあなたがたが失ったために悲しまず、与えられたために、慢心しないためである。本当にアッラーは、自惚れの強い高慢な者を御好みになられない。(鉄章 57/22-23)

・本当にアッラーは、御好みの者を迷うに任せ、悔悟してかれに返る者を導かれる、これらの信仰した者たちは、アッラーを唱念し、心の安らぎを得る。アッラーを唱念することにより、心の安らぎが得られないはずがないのである。(雷電章 13/27-28)

・至高のアッラーはこう申された。「私の友がらに敵意を示す者には、自分は誰にたいしても戦いの宣言をする。私の気に入ることをして私に近づこうと望む下僕は、自分に課された宗教的義務をきちんと果すにしくはない。定められた義務以外の良い行ないに努める下僕は、ますます私に近づき、ついには私の愛をかちうるであろう。そして私が彼を愛するようになれば、私は彼の聞く耳、彼の見る眼、彼の打つ手、彼の歩く足となろう。彼に願いごとがあれば私はかならず叶え、彼が避難所を求めればかならずそれを用意してやるだろう。(「40のハディース」第38の伝承)

・東も西も、アッラーの有であり、あなたがたがどこに向いても、アッラーの御前にある。(雌牛章 2/115)

・われは本当に(しもべたちの)近くにいる、かれがわれに祈る時はその嘆願の祈りに答える。(雌牛章 2/186)

・本当にわれは人間を創った。そしてその魂が囁くことも知っている。われは(人間の)頸動脈よりも人間に近いのである。(カーフ章 50/16)

・本当にアッラーは、主を畏れる者、善い行いをする者と共におられる。(蜜蜂章 16/128)

・あなたがた信仰する者よ、忍耐と礼拝によって助けを求めなさい。本当にアッラーは耐え忍ぶ者と共におられる。(雌牛章 2/153)

・苦難のさいに祈る時、誰がそれに答えて災

難を除き、あなたがたを地上の後継者とするのか。アッラーと共に（それが出来る外の）神があらうか。（蟻章 27/62）

・アッラーは誰にもその能力以上のものを負わせられない。（雌牛章 2/286）

・アッラーのみ使いはいわれた。「アッラーは次のように宣言された。“私のしもべが、私に思いを馳せれば馳せるほど、私は、しもべの近くにいるであろう。しもべが私の名を唱えるほど、私は彼と共にいるであろう。もしもしもべが私を想念すれば、私も心で彼を想うであろう。もしもしもべが私を集会の場で想念すれば、私もまた、集会の場で彼をもっとよく想い出すであろう。もしも、しもべが手の長さほどでも私に近づくならば、私は腕の長さほど彼に近づくであろう。もしも彼が腕の長さほど私に近づくならば、私は両手をのびした長さほど彼に近づくであろう。もしも、しもべが私にむかって歩いてくるならば、私は彼の方に走ってゆくであろう”」（「サヒーフ ムスリム」第3巻 p.595）

・アッラーのみ使いはいわれた。「アッラーは次のようにいわれた。“私は、私を思うしもべのその思いの中にいる。私は、私を祈念するしもべと共にいる”」み使いは次いでこうも話された。「アッラーに誓って。アッラーは、あなた方のだれかが迷った駱駝を水のない砂漠でみつけ出した時の喜び以上に、しもべの懺悔を喜び給う。アッラーは、“しもべが私に、手のひらの長さほどでも近づけば、私は腕の長さほど彼に近づき、しもべが腕の長さほど私に近づけば、私は両手をひろげた長さほどしもべに近づくであろう。また、しもべが私の方まで歩いて近づいてくるなら、私は走ってしもべの方に近づくであろう”といわれた」（「ムスリム」第3巻 p.633）

<格言>

・人生においていちばんたいせつなことは自分を発見することである。（ナンセン）

・自分の殻から抜けでよ、そうすれば広い視野が開けるだろう。（ペトロニオ）

・人間は自分は何をもっているかはよく知っているが、自分は何であるか知らない。（ヴィトゲンシュタイン）

・寒さにふるえた者ほど太陽の暖かさを知る。人生の悩みをくぐった者ほど生命の尊さを知る。（ホイットマン）

・人生の最大の榮譽は一度も失敗しないことではなく、倒れるたびに起きるところにある。（ゴールドスミス）

・どの道にもそれぞれの苦労がある。どれだけ歩いたか気にせず、愛をこめて歩め。（作者不明）

・真理を探究しはじめることによって、まことの人生がはじまる。（レッシング）

・何もかもなげうって死さえもいとわないほど価値のある宝が見つかったときこそ、人は本当の意味で生きる。（アントニー・デ・メロ）

・わたしの態度のほかに変わったものは何もなかった。それだからこそ、すべてが変わったのだ。（アントニー・デ・メロ）

・変わろうとするのをやめるとき、そのときは、生きようとするのをやめるとき。（アントニー・デ・メロ）

・何ものをも拒否するな。何ものにもしがみつくな。（アントニー・デ・メロ）

友人とは、あなたについてすべてのことを知っていて、それにもかかわらずあなたを好んでいるひとのことである。（エルバード・ハーバート）



\*「人と人をつなぐ月刊総合誌」を皆さんに届けている上で今回よりインタビューのコーナーを作ってみることにしました。

私がイスラームを知ろうと思ったとき、色々な本を読みましたが、ほとんどの本は本当に知りたいイスラームの奥深い事が書いてありませんでした。その中で、この雑誌でも紹介されている「預言者ムハンマドを語る」はムハンマドの生きていた時代のイスラームの生き方が目に浮かぶようでした。今回はその本「預言者ムハンマドを語る」を翻訳した樋口めぐみさんに話を聞いてみようと思いました。

Q：最近特に「イスラーム＝テロや紛争」というイメージで報道されたり、語られたりすることが多い中で何故この本を、翻訳をしようと思ったのですか。

A：イスラームは世界人口の5分の1が信仰している教えです。イスラーム教徒は生きる上で多くの点において預言者ムハンマドを模範としています。イスラームの本当の姿を知る上で大きな手がかりとなるのは、やはり預言者ムハンマドについて知ってみることでないでしょうか。彼らイスラーム教徒たちが模範としている人とは、どのような人物だったのか。この教えはどのような状況下で、どのように伝えられ、広められていったのか、これを知ることで、本来のイスラームが見えてくると思いました。

Q：この本をどのようにして知ったのですか？

A：トルコ人の知人からこの本を紹介され、興味深く読んだのでイスラームの国では預言者がどのように語られているかを紹介してみることにしたのです。

Q：翻訳するときに苦労したことはありますか？

A：トルコ語にあって日本語にはない概念があったり宗教用語など、適切な言葉が見つからず苦労しました。その場合、カタカナでそのままアラビア語表記にし、注釈をつけたり、一番近い意味の日本語にして注釈をつけるようにしました。

Q：この本の特徴は何だとおもいますか？

A：イスラーム世界で、イスラームの預言者がどのように語られているか、がそのまま伝わる点。預言者の人生が非常に多彩な角度から解き明かされているところ、など。

Q：本の中で、読者にどのようなメッセージを伝えたかったのですか？

A：私自身は訳者なので、自分からのメッセージを付け加えるようなことはしていませんが、著者の方のメッセージができるだけありのままの形で伝わるよう、気をつけて訳しました。

Q：出身校は？

A：大阪外大です

Q：専攻はやはりトルコ語ですか？

A：はい

Q：トルコ語を選んだ理由はなんですか？

A：あの地域の文化や宗教に興味がありました。その中でトルコ語専攻は出来て数年で新しかったので惹かれました。新し物好きなので。それに、トルコ語は日本語と語順が同じなので学びやすかったです。

樋口さんは、この本以外にも翻訳の仕事をされているそうです。次回は他の仕事について聞いてみたいと思います。



### 言葉がもたらす災いと純潔さ

預言者ムハンマドは次のように言われた。

「誰であれ、その両あごの間と、両足の間の事について私に約束し、保証する者に、私は天国のための保証人になろけ、赦しを乞う仲介をしてくださり、保証人になってくださるであろう。先月からのつづき。。

#### 表現に見られる美德

預言者ムハンマドは人前で言うのは遠慮されるべきである器官の名を直接述べられてはいない。「足の間」という表現をされている。これもこのお方の素晴らしい徳の表れでもある。このお方は常に、自然な、被造物の摂理を語られる時でさえ、彼特有の美德の持ち主であられるのであり、このような、一部の人間にとっては最も気に入らないような事項を語られる時は、預言者ムハンマドはそれをその表現によってきれいな形にされた上で口に出されるのである。このお方は徳と性格において、計算された存在なのである。

このように、人前では憚られるべきこの器官について触れられる時、預言者ムハンマドは特有の美德によってこの器官を表現され「両足の間」と言う表現を使われているのである。美しさにふさわしいものは当然美しさである。

#### 両足の間

これは非常に重要な事項である。アーダムが天国から追放される原因になった禁じられた果実も、彼の前にそうした姿で現れたと言う。ここでは、この話を詳しく解説することはしない。ただ、この重要性についてのみ、少々触れておきたい。

子孫の継続はこの道からなるものであるが、同様に、姦淫や売春行為によって子孫の荒廃をもたらすのもまたこの道である。これが悪い形で実行されると、誰が誰の子供で誰が誰の親か、という混乱が起き、法によって守られるべき最も重要な点が、崩壊してしまう。すなわち、誰が誰の父親か？ この人の遺産は誰が引き継ぐのか？ 誰が誰から権利を求めるのか？ という問題が起こる。家族はいかにして保護されるのか、民族はどうやってその地位を維持するのか。こういったことは皆、この両足の間の問題にかかってくるのである。高潔な人々やその人々から現れた集団は、自分たちの体内にあるものを審判の日まで守り続けるが、姦淫や売春の泥沼にはまった人々、民族は自分の存在を一世代後に残すことすらできないのである。

どのテーマにおいてもそうであるように、このテーマにおいても、ハラール（許されたもの）として認められている部分は大きく、それで人間の欲望には十分なはずである。人におけるその欲望は、最良の形で、ハラールとして満たすことができるのである。だからこそ、預言者ムハンマドは「結婚しなさい。子孫を増やしなさい。あなた方の数の多さを他の共同体に対して私は誇ろう<sup>2</sup>」と言われているのである。預言者は、御自身の共同体の多さを他の共同体に対して誇られるのである。その数は増えるべきであり、そうす

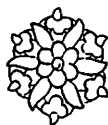
<sup>2</sup> Munavi, Feyzu'l-Kadir 3/269; Hindi, Kanz al-'Ummal 16/276

れば他の共同体はその蔭に隠れてしまうだろう。共同体の数が増えることもまた、この両足の間の問題にかかっている。増加という結果はただこの道から得られるものなのである。純潔を守る者も、守らない者も、この道からそれぞれの結末へと進んで行く。これはこの相反する二つの道のどちらにも、非常に影響力を持つ器官なのだ。

人がこの欲望に対してハラールの道を求めれば、ワージブ（ファルドではないがファルドに近い義務のもの）の善行を行なった事になる。教友たちにこのことが明らかにされた時、彼らは驚き、なぜそうなるのかを尋ねた。それに対して預言者は微笑まれながらこう答えられた。「もしハラールな方法でなければ、ハラームになるのではなかったか？」<sup>3</sup> ハラーム（禁じられたもの）を放棄することはワージブである。従って、ハラールとなる形でそれを実行する者は、ワージブの善行を行なった事になるのである。


このテーマは言葉に出すのが憚られるようなものではあるが、しかし預言者たちでさえも通った道なのである。もしアダムにこういった感情が与えられていなければ、この世界の名誉である預言者ムハンマドはどうやってこの世に生まれて来られることができたであろうか。あの禁じられた果実の本当の目的は預言者ムハンマドという果実の収穫であると言える。

「もしアダムが、彼がその禁じられた果実に手を伸ばすことと預言者ムハンマドの到来との関係を知っていたとしたら、ただ手を伸ばすだけではなくその木を根こそぎ食べていただろう」という言葉を私は熱い心を持ったある説教師から聞いたことがある。



---

<sup>3</sup> Muslim, Zakat 53; Ibn Hanbal, Musnad 5/167,168



去年1年間の出来事を通して、私の子どもたちと関わるスタンスは大幅に変わったと思います。一番変わったのは「子育て」ではなく「子育て」をしているというところでしょう。今までずっと一生懸命子育てをしてきました。でも、今は、子が育つのを支援するという立場に徹しています。私がかれらの人生の主人公にならないように、十分注意しています。彼らの人生の主人公は、彼ら自身であることを肝に明記しています。20年目からの子どもとの関わり方、接し方ではこのように、大幅な変化がありました。そのことについてみなさんにお話してみたいと思いました。子育て真っ最中のみなさんがフウと深呼吸してくださり、立ち止まって考えてくださる事ができますことを心から願っております。

### 簡単にできる子どもとの接し方

#### その1

まずはじめに、アッラーを想い、アッラーとともにいる時を長くすること。私達がアッラーとともにいるとき、子どもと接する事ができれば、全てはうまくいきます。でも私達が思うようにいくと言う意味ではありません。たとえば、すぐに子どもたちが親たちや先生のいうことをきくとか、クルアーンを読めるようになるとか、あまたがよくなり学習力がUPするとかいう具体的な変化がおこるという事ではありません。でもこのような子どもと接する心構えができますと、確実に効果はあらわれてきます。

さて、私達、母親が思い違いしやすいことがあります。それは私達が子育てしているとおもっていることです。本当は、子どもは育つのです。少々らんぼうないいかたをすれば、私達が育てようが育てまいが育ちます。私達が子どもたちにしていることは実はほんのささいなことです。子どもが大きくなるにつれて、もしかしたら、こどもにいささかも影響を与えていないかもしれないと思う事がよくあります。私達は子育てをしようとするので、疲れ果ててしまい、ついにはイキツクコトモできないくらいです。どうすればよいかよくわからなくなり、余裕もなくなってきて、私達からは次第に笑顔が失われていきます。しかし、実は関わり方の順番が少しかわれば、大変楽になるのです。関わり方の順番と言うのは、アッラーと子どもとそして私達のポジションのことです。親は直接子どもと関わるのではなく、アッラーを通して関わるのがベストであり、また、それは親子の最も自然な関わり方であるともいえます。私達がアッラーと共にいることで、私達と共にいる子どももアッラーとともにいる時間を過ごすことができます。その時間が長いほど、そういった空間が多いほど、子どもは自然に子ども本来のあり方を見出しやすくなります。そしていつしか自分自身だけでもアッラーと共にいる時間と空間を見出ししていきます。

ここで1つ注意することがあります。それは、決して私達が子どもに直接何かをしようとか、何かができるとか思っははいけません。その時、そこ(私達の心)には、自我がむくむくと発生し始め、心は傲慢さにとりかこまれてしまうからです。そして私達は身動きがとれなくなり、アッラーの御望みになる子どもの姿を見失います。

そうです、簡単にできる子どもとの接し方、その1は、アッラーを想い、アッラーとともにいる時を長くすることでした。さあみなさんの試しあれ。





## 近い将来についての言及

## 3. 家族の中で彼に最初にお会いできるのは

預言者ムハンマドが、その死の原因となった病を得られたある日、そのこまやかさや、立居振舞、深いまなざしまで全てその父に似たファーティマを、そばに呼ばれた。そして身をかがめ、その耳に何かをささやかれた。ファーティマは泣き始め、その哀しみ方の激しさに、皆は驚いた。少し後に再び預言者はその耳に何かをささやかれた。今度は彼女は大変喜び、見ていた者は、天国の扉が開かれてそこに入れるという呼びかけでも来たのかと考えた。そもそも彼女にとって、その知らせはそのようなものであり、だからこれほど喜んだのであった。

この出来事は、聖アーイシャの目にもとまった。彼女に理由を尋ねた。しかしファーティマは「これは預言者の秘密です」と、何も説明しなかった。アーイシャが、預言者が亡くなられた後に再び尋ねると、その時、ファーティマは次のように答えた。「一度めは、彼が亡くなるという知らせでした。二度めは、家族の中で彼に最初にお会いできるのは私だという知らせでした。それで喜んだのです」<sup>4</sup>

六ヶ月の後、彼女は父親の元に行った<sup>5</sup>。そしてこの彼女の死もまた、預言者ムハンマドの正当性を認め、彼に「あなたの言うことは正しい」と言っているのであった。

## 4. 平和の時代の吉報

6つのハディースの本の多くで触れられている預言者ムハンマドの言行に、次のものがある。ある日、預言者は説教台におられる時、孫であるハサンを示されて言われた。「これは私の子供であり、預言者の家系からの者である。アッラーは将来彼をもって二つの大きな共同体を和解させるであろう」<sup>6</sup>

彼は気前のよい人であり、預言者の子であり、紳士的であった。彼自身に与えられた王位を、共同体の間で分裂があるのを防ぐだけのために、放棄し、預言者の家系の者であることを示すはずであった。そして25年、30年と待つこともなく、預言者の言われたことは一つ一つ実現したのである。アリーの後、ウマイヤ)の者たちはハサンを選んだ。しかしこの平和と平穏の人ハサンは、全ての権利を放棄することを宣言し、対立状態にあった二つの共同体の間に和解をもたらせ、惨事が起こることを一時的ではあったにしる、防いだのである。<sup>7</sup>

預言者が彼についてのこの知らせをもたらされた時、ハサンはまだ小さい子供であった。おそらく、その日預言者が何を話されたかも理解していなかっただろう。つまり、預言者がこのように言われたから、と言ってこういうことをしたのではないのである。預言者ムハンマドは、彼がそうするであろうことを知っておられたからこそそうおっしゃられたのである。ハサンも、祖父の正当性を認め「あなたの言うことは正しい」と言っているのである。

<sup>4</sup> Bukhari, Manaqib 25; Muslim, Fada'il al-Sahabah 98, 99

<sup>5</sup> Ibn Hanbal, Musnad I,6

<sup>6</sup> Bukhari, Sulh 9; Ibn Hanbal, Musnad 5/49

<sup>7</sup> Ibn Kathir, al-Bidayah 8/45



## 隕石のメッセージ

2002年のニュース記事によれば、直径で2キロの隕石が2019年2月1日に地球にぶつかる可能性が6%もあることがありました。2003年9月初めに、NEO（地球に接近して脅威となる地球近傍天体）情報センターによって作成された声明で、「2003QQ47」として知られている隕石が2014年3月21日上に90万分の1の確率で地球に衝突するとされ、この隕石の爆発力は広島原爆より2千万倍強いはずでしょう。2003年4月23日に、直径で5メートルの隕石がメキシコから何百キロも離れた太平洋に落ちました。生じた爆発は、ロスアラモス国立研究所によると広島原爆によって解放されたエネルギーのほとんど半分を測ったエネルギーを解放されました。もし隕石が50メートルの直径を持っていたなら、爆発はおそらく千倍も強かったでしょう、そしてもし直径が500メートルなら、爆発は太平洋の海岸に沿って住んでいる何十万という人々の死を起こしたであろう。巨大な津波に導いて、百万倍も強かったでしょう。もし隕石が5キロの直径なら、爆発はおそらく10億倍も激しかったでしょう。そしてこれは地球の上にほとんどの生物の絶滅に導くことができたはずで

このような事態がすでに地球上に起きていたという証明が1980年に初めて発表された時に、人々の間に似たような衝突の脅威が広がりました。アメリカの物理学者ルイス・アルヴァレス氏と息子のウィリアムによるとおよそ6千5百万年前に（白亜紀の終わりに）、地球に衝突した隕石の結果として、気候がまったく変化していた。そしてこれが多くの種の絶滅に導いていたという仮説を提言しました。化石によって支援されるこの理論によれば、直径10キロの隕石が地球に衝突し、その結果ほこりの雲が何年もの間地球を暗闇に残し、太陽の光線が地球に届くことができなかつたという仮説です。それによって光合成を妨げ、従って植物が絶滅し、動物も絶滅したということです。空気の冷却、山火事の結果として大気を満たした有毒なガスと次酸性雨によって地上の生物や海生動物における絶滅が起きたをいうことです。この仮説によれば種の8割が数千年の間に地球から姿を消しました。

このようなことが起きたのは一回限りではありませんでした。およそ4億4500万年前に（オルドビス紀の終わりに）宇宙からからのガンマ線によって地球上の全種の3分の2が絶滅のしてきたはずで

す。ガンマ線爆発は知られている最も強い爆発です。巨大な星が寿命の終わりにブラックホールの中に内破する時に非常に強いガンマ線を放射します。もしこのような爆発が我々の銀河で起きていたらガンマ線が非常に破壊的だったのであろう。海表面に非常に近い生き続けた「三葉虫」のような種がこの期間に大きな損失を経験したことになります。これはガンマ線爆発の発生によってのみ説明ができました。ガンマ線爆発によって地上と海表面に近い生物に影響を与えるであろう。しかし深い海に生存する生物は助かったことになります。

およそ2億5000万年前に（ペルム紀と三疊紀の境界線）、もう1つの原因によっての大量絶滅が起きました。おそらく海の種の9割と地上に生存する705の種の90%が地球から姿を消しました。これらの絶滅は気候における速い変化と海面の位置の変化、あるいは激しい火山活動における突然の出来事です。これらの要因に加えられるのは「宇宙からの物理的な原因」です。

1990年代に、天体物理学者が太陽系のバランスが非常に微妙であった、そして長期の軌道を

予測することが不可能であることを理解しました。惑星と衛星の通常の動きを別に、数え切れないすい星と小惑星との総合的に影響を受け合うことから、前もって計算することが不可能です。

地球は大きい隕石から月の引力の存在で守られていて、それより小さい惑星は大気圏に侵入すると燃えてしまうのです。もちろん地球にかなりの大きさの隕石が衝突する可能性はいつも否定できません。この世の終わりがいつ、どのようにくるかも未定です。ノハがそのような隕石の衝突によって陸が海に覆われ、陸の動物を生き残すために箱舟を作ったのでは考えられることもあります。

アッラーがクルアーンのカーフ章で人間に天をみて考えるように進めています。

「かれらは頭上の天を見ないのか。われが如何にそれを創造し、如何にそれを飾ったか。そしてそれには、少しの傷もないと言うのに。」カーフ章6筋

またこの地球の終わりはいつであれ、我々一人一人がいずれアッラーの元に戻ることになります。このことはクルアーンで以下のように示されています。

「またアッラーと一緒に、外のどんな神にも祈ってはならない。かれの外には、神はないのである。かれの御顔の外凡てのものは消滅する。裁決はかれに属し、あなたがたは（凡て）かれの御許に帰されるのである。」物語（アル・カサス）章88筋



## レシピコーナー

### りんごのポロポロケーキ

りんご 中1個

バター 6g(大1/2)

三温糖 12g(大1と1/3)

シナモン 少々

レーズン 20粒くらい

A

小麦粉 60g(カップ2/3)

三温糖 30g(大1と1/3)

バター 50g(大4)

1.りんごは厚めのいちよう切りにし、バターで炒める。

三温糖、シナモン、レーズンを加えてアルミカップに入れる。

2.小麦粉と三温糖を合わせたボールにサイコロ状に切ったバターを入れて指でもみこむように混ぜ、

ポロポロのクッキー生地を作る。(Aの材料)

3.1.に2.のをせて、オーブントースターで7-8分、表面がカリッとするまで焼く。

## 復活 (4月号からのつづき)

## 8つめの論拠「約束を守る」

来なさい、そのお方からもたらされたご命令を君にも読んであげよう。見なさい、繰り返し約束され、また厳しく警告されている。「あなた方をそこから連れ出し、私の国の中心地に連れて行こう。従う者を幸福にし、従わなかった者をとらえよう。この一時的な場所を破壊し、永遠なる宮殿や牢獄をもった別の国を創造しよう」

これらの約束された事項はそのお方にとって非常に容易なことである。その民にとっては非常に重要なことでもある。約束の反故などということは、その偉大な支配者にはあり得ないことなのだ。<sup>8</sup>

愚か者よ！君のそのまがいものの妄想や、たわごとをいっている知性、いんちきな自我といったものを君は容認しているのだ。そして、どのような形であれ約束の保護や嘘といったものを必要とされず、またいかなる形であれ偽りの体面など要しないお方、目に見えるあらゆる事項においてその正しさを証明されるそのお方を、否定しているのだ。当然あなたは厳しい罰を受けるにふさわしい人ということになる。

君は次の例に似ていると言えるだろう。一人の旅人が太陽の光に目を閉じ、幻影を見ている。妄想で、一匹の蛍のようなヘッドライトの明かりで、険しいその旅路を照らそうとしているのだ。

約束がなされたのであるから、必ず実行されるであろう。その実行というものはそのお方にとっては容易なことであり、我々や全てのもの、そしてそのお方とその国にとっても、非常に重要なことなのである。

すなわち、偉大な裁きの場があり、大きな幸福が存在するのである。

## 9つめの論拠「不滅の王国に不滅の地」

来なさい！この土地の、この集団の、何人かいるリーダー達に注目してみなさい。それぞれが皆、支配者と話すための、それぞれの電話を持っている。そのうちの一部は支配者に直接お会いしてもいる<sup>9</sup>。あの人たちが何を言っているか注目してみなさい。

彼らが皆一致して告げていることがある。すなわち、支配者であるお方が、報奨や罰のために、実に素晴らしくまた恐ろしい場を用意された。確かに約束され、また強く警告されている。またそのお方の名誉や偉大さは、どのような形であれ、約束を実現されずに、その威厳を傷つけられたりすることを認められない。

この知らせを告げる者は非常に多い。これほどの人数が揃って偽りを言うことは不可能な状態である。またその知らせの共通性も確かなものである。そうして一致して、この知らせを告げているのだ。

すなわち、そのしるしがいくつも見られるこの偉大な王国の中核の地、本来の地は、ここから遠い別のところにあるのであり、ここ試練の場にある建造物などは一時的なものなのだ。後に、永遠の宮殿へ移される。この地は変化するであろう。

いくつもの兆しによってそのしるしを読み取ることのできる、その素晴らしい不滅の王国は、このようなはかなく一時的な、定まらず、些細で変動的なところ、不完全な状態のところには創られず、またそこに存在することもあり得ない。つまり、しかるべき、将来を持った、不滅の、永続的で完成されたところに存在するのだ。

すなわち、別の地が存在する。そこに、本来の地に、行くことになるのである。

<sup>8</sup> アッラーは約束を破らないことについていくつかの節の中で次の節を参照。聖クルアーン「イムラーン章3/9」主よ、本当にあなたは疑いの余地のない(最後の審判の)日に、人びとを集められる方であられます。アッラーは約束をたがえられることはありません」

<sup>9</sup> この方々は預言者やXXを意味する。



私事になってしまいますが、私は今年はじめから非常勤の仕事に就きました。ですが、1~3月は慣れない仕事場ということもありばたばたするうちに過ぎていきました。年度末をようやく乗り切り、4月になって少し時間が出来たので、周囲の人たちにこのことをお知らせしよう、と思って葉書を作りました。それを最近会っていない友人などに送り、何人かから返事をいただきました。色々な反応がありましたが、そのうち、大学時代に仲の良かった友人から手紙が来ました。いや、友人というより「友人の母」からでした。大学卒業後、学生時代より興味を持っていた障害者の手助けなどを行うため、地元北九州の役所に勤めていた人で、いつもおっとり、にこにこして私はあまり会えないながら、いつも気にしているような、大好きな友人でした。一時は親元から仕事へ通っていたのですが、そのうち一人暮らしをはじめており、私はそちらの住所に葉書を送ったためこの手紙を「あ、別のところに引越したのかな？それとも、結婚でもしたかな？」と、軽く考え封を切りました。

その手紙には、「お葉書ありがとうございました。ですが××（友人の名前）は先月末早朝に永眠しました」と書かれていました。私は大変驚き、動揺しました。なんでだろう？なにがあったんだろう？早朝ってどういうこと？前会ったときは仕事しているからといってご飯をおごってもらったから、今度は私がと思っていたのに、どうしよう？就職してからだって、まだ何年もたってないし、何もしてないじゃない？……色々な想いと出会った頃の事、楽しかった事、などが頭の中を交差しました。

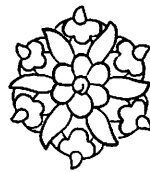
少し落ち着いてから、友人の母に手紙を書きました。連絡ありがとうございます、辛いでしょけれど、もしよろしければ亡くなった事情などお知らせください……。彼女の大学時代の写真などがあれば、封筒と一緒に入れてあげたかったのですが、探してみると一緒に行った所の写真はありましたが彼女の写像是おろか、私と一緒にうつっているものもありませんでした。会おうと思えばいつでも会える、そう思っていたからでしょう。結局、携帯を買ったときに面白がって撮った写真一枚しかありませんでした。それを見ると、元気そうで、そのとき「社会保障とか介護認定とかはさ、本当に必要な人に行くんじゃないかって、ごねたもの勝ちなんだよね～。いい人はさ、声が届きにくいんだよね。納得いかんよ～」と、熱く語っていたことを思い出しました。彼女ならもっと「いい人」の声を拾うことも出来ただろうし、本当に必要な人に本当に必要な事が適応されるようにがんばれただろうし、他にも色々な仕事も出来たろう。結婚して幸せにもなれただろう、まだまだやってないことがいっぱいあるじゃん、と、再び悲しくなっていました。

私はここ2年ほど、ずっと墓の調査をしていました。ですから、墓や死に関して頭ではいろいろ理解していたつもりでしたが、知人の死に際して、本当に「人がこの世からいなくなる事」がどういふことなのか心で感じるようになったように感じました。今まで身近な人では祖母が亡くなってはいたのですが、亡くなる間際や葬儀などの際にはものすごくややこしい親族関係と内部の確執に頭をまわすあまり、祖母の死そのものが私の中に占める割合は多くありませんでした。いまだに、「そういえばいないんだっ  
2005年5月 やすらぎ

け」と思うことがあります。ですが、祖母よりも短い間しか一緒にいられなかったうえ、血のつながりは全く無い友人の死というものが、これほど大きな衝撃と感情を伴ってやってきたことに私自身驚きを禁じえません。何故でしょう。月並みな言葉ですが、「明るい未来があるはずだった（若かった）」からかもしれませんし、自分にも未来が無い可能性を感じたのかもかもしれません。違うかも知れません。少し時間の経った今でも、これはよくわかりません。

明日があるかわからない。今日しかないかもしれない。いや、今日だけじゃなく、後一時間後もあるかわからない。わからないだけに、悔いのないよう一秒一秒をすごす努力をしなければならないのかもかもしれません。これは、頭で考えはしていても、実行するのは難しいことです。ですが、このことをより身近に感じられた事、そして一人がいなくなるというのはなんと大きなことかをしみじみと思い知らされた事、この2つの事が友人が私にくれた最後のプレゼントなのかも知れません。これらを大事にしていることで、友人は私の中で消えることなく常に心のどこかにある存在になったように思います。友人は亡くなってしまったけれど、彼女のした事、彼女と話した事、彼女から考えさせられた事は周りの人によってずっと記憶され続けている、そのことによって彼女はちゃんと生きているのだな、と感じられます。これが、彼女に対して私ができる唯一の事であり、私なりの供養の方法です。

友人の死は悲しいですし、本当に寂しい事ですが、様々な事を考えさせられた出来事でした。





## 名前が記されている唯一の女性 マルヤム様(聖母マリア)

アブドッラー・アユマズ

一人のムスリムとして、「クルアーンで名前が記されている唯一の女性 マルヤム様(聖母マリア)」という名の詩と、インフォ誌に掲載された「私たち皆のマルヤム様」という論説によって、私はこれまでも、マルヤム様に関する考えを述べてきました。

ここでは、別の観点からこのテーマについて取り上げてみたいと思います。

聖クルアーンは、マルヤム様を、純潔を守る点で最良の女性、模範として、特に優れた高潔さと潔白さの持ち主である女性と説いています。私たちはマルヤム様という名前を、愛する者たちに与えます。トルコでは人々は彼女を「母マルヤム」と呼びます。エフェスにある家を訪問し、墓もまたそこにあるものとして喜びます。

偉大なクルアーン解釈者であるファフルッディン・ラージは、自身の解釈で次のように記しています。「アッラーは、アードムを、その時点の被造物よりもなお優れた特性と共に創造された。そしてアッラーは、魂の強さの成熟と、完全さへの到達を、彼の一族のうち一部に与えられた。彼らはその数を増した。後にヌーフへと、さらにはイブラーヒームへと続きました。そしてイブラーヒームからイスマーイールとイスハックに流れが分かれました。イスマーイールは、ムハンマドの聖なる魂が現れ、選ばれることの始まりとなった。イスハックも、子孫から子孫へ、はるかアリ・イムラーンにいたるまで、ヤアコーブの血統の預言者たちの出現、そしてイーシャの血統によって財産の始まりとなった。そしてこの状態がムハンマドにいたるまで続く。全ての預言者は、その当時において最上の選ばれた人たちであった。最後にムハンマドが現れたことにより、預言者性という光、富という栄誉が、預言者に受け継がれたのである。」

マルヤム様の父は、メタンの子イムラーンです。彼も、イーシャの子ダーウッド、その子預言者ス

レイマーンの血筋です。この血統もまた、ヤアコーブの子ヤフダの血筋です。そもそも、ムーサーとハールーンのそれぞれの父の名も、イムラーンです。ムーサーとハールーンという二人の預言者のそれぞれの姉の名も、マルヤム様です。この二人のイムラーンの間には、1800年という歳月が流れているともいわれています。

そう、マルヤム様は、このような一族に生まれた人なのです。

これらから到達できる点が、イブラーヒーム(アレイヒッサラーム)です。そこからまた、私たちの第二の父ヌーフ(アレイヒッサラーム)、そこから、第一の父アードム(アレイヒッサラーム)です。私たちは皆、同じ祖を持つのです。

ベディウヅザマン・サイド・ヌルシは以下のように語ります。「そう、あなたは否定できない。あなたが一人の人と同じ大隊にいることによって、彼に対し親友としての結びつきを感じる。そして一人の司令官の命令にともに従うことによって、友としてのつながりを感じる。そして同郷であることによって、兄弟のような愛情を感じる。信仰の与える光と意識によってあなたに示されている、伝えられている神の御名の数だけ、同一であることによる結びつき、一致によるつながり、兄弟としての愛情が存在するのだ。例えば、私たち皆の創造主は同一、私たちの主は同一、崇拝の対象も同一、私たちに糧を与えられる存在も同一、人間に顕示される神の美名の数ほどに、私たちは結びつきを持つ。」(22番目の書簡)

慈しみ深く、潔白というマルヤム様のイメージが人々の理性に存在し、また純潔と高潔さのシンボルとしての母マルヤム様も、私たちアナトリアの人々の心に存在しています。この愛情があるからこそ、エフェスに彼女の家があると認めているように、墓もそこにあることを私たちは想像し、これが絶対的な事実であることを強く望みます。彼女の名前を、私たちは自分の娘たちに与えます。

そして「私たちの母」として、彼女を「母マルヤム」と呼ぶのです。女性のイスラーム教徒の中には、彼女を夢で見て、全ての偉大な人たちの魂に開端章、ヤーシーン章を読み、捧げようとするのと同様に、マルヤム様の魂の為にもそれを捧げる人々もいます。彼女の存在は、イスラーム教徒とキリスト教徒をお互いに接近させる、私たちの共通項の一つなのです。

マルヤム様については、直接的、間接的をあわせ、クルアーンの13の章で35回、言及がなされています。

マルヤム様の母は、妊娠した時、おなかの中の子がアッラーのために礼拝場で奉仕することを望み、願をかけました。しかし出産にいたり、母は驚きうろたえました。なぜなら生まれてきたのは女の子だったのです。礼拝場で導師になることはできそうにありませんでした。彼女は娘の名をマルヤム様とし、アッラーに委ねました。アッラーは彼女のドゥアーをよりよい形で聞き入れられました。男の子が授けられることはありませんでした。しかし、最後の審判の日まで、名誉あるその名が思い起こされ続ける、そして何十億という人々が従う偉大な預言者の母となるマルヤム様が、授けられたのです。アッラーは彼女を美しい植物のように育てられました。なぜなら母も、父イムラーンも亡くし、彼女は孤児となったのです。この栄誉ある家に遺された子を誰が世話するかということできが引かれ、結果マルヤムはおぼの夫である預言者ザカーリヤの庇護のもとに入りました。

世の女性たちの中で、選ばれた存在であり、清らかさを持っていたマルヤム様のもとには、彼女がまだ子どもである時から、天使がおとずれ、褒め称え、感謝と共にイバーダをするべきであることを教えました。彼女の母のドゥアーが認められ、マルヤム様は礼拝所の適した場所でイバーダを行いました。天使たちの訪問は続き、マルヤム様に吉報をもたらしたのです。「あなたには、マスイーフ・イーサーという、現世でも来世でも名誉と尊さの持ち主となるであろう息子が生まれるでしょう。彼は、アッラーに近い者たちの一人となり、

また、まだゆりかごにいる時に話すでしょう。」と。この驚くべき知らせに、マルヤム様は、「私に誰も指を触れることすらしに、どうやって私の子どもが生まれましようか。」と応じました。そして「アッラーは、お望みになられたものを創造される。それが何であれ、「あれ」と仰せられることによってそれを実現させられる。」という返事が与えられたのでした。

彼女のもとを訪れたのは天使のみではありませんでした。天国の果実もまた、もたらされました。マルヤム様が魂の世界へ上昇するごとに、その世界の益が彼女へもたらされるのでした。この状況はザカーリヤの注意を引き、彼は「これらはどこから来たのか？」とたずね、彼女も、この奇跡のゾーンからくる恵みについて、「アッラーの御許から与えられました。」と答えました。

私たちのモスクのミフラブのところには、この脅威の出来事を語るクルアーンの章句が、きれいに飾られ、礼拝場の頭に載せられた冠のようにかかげられているのは、なんと美しい習慣でしょうか。

一時、マルヤム様は人々から離れ、東の地に引き籠り、また身をさえぎる幕を垂れました。この時のことについてアッラーはクルアーンで次のように仰せられておられます。「かの女はかれらから（身をさえぎる）幕を垂れた。その時われはわが精霊（ジブリール）を遣わした。かれは立派な1人の人間の姿でかの女の前に現れた。」

現れた精霊は、以前天使たちが伝えた吉報と同じ知らせをもたらし、純潔を守っていたマルヤム様が驚き畏れるのを見て、アッラーのお力は全てに対し十分であり、この出来事が一つの奇跡として現実に起こるであろう、ということを書きました。

運命があらかじめ定めた形で、マルヤム様は妊娠しました・・・。

この奇跡が創造されたことについて、ベディウツザマンの教え子であった故メフメット・フェイジ・バムックチュは、次のように分析をしています。「アッラーは、ビザンチン章で、人々の言語や



肌の色が様々であることを述べられ、多様な形で創造される力をお持ちであることを示される。アダムを母も父も持たない存在として創造され、それに続く人々を一人の母と一人の父から創造された。イーサーも父を持たない存在として創造され、環を完成させられたのだ。」

ヤーシーン章においてアッラーは、全ての被造物をご存知であることを明らかにされておられます。そもそも、全ての天使たちやアダムのように、生命を持つもののそれぞれの祖も、母と父を持たない存在として創造されました。

蜜蜂は、女王蜂がオスから取った精子を一つの袋に集めています。精子がかけられた場合はメスの幼虫となり、かけられなかった場合はオスの幼虫になります。つまりオスの蜂には父親がいないのです。このように、アッラーの創造には、まさに驚くべき、奇跡的な芸術性が存在するのです。アッラーのなされたあらゆる事象において、英知と神秘が存在するのです。私たちがなすべきことは、この創造のハーモニーから教訓を得て、アッラーの荘厳さ、偉大さに対し、一人のしもべとしてなすべきことを果たすことなのです。

マルヤム様は、陣痛が始まった時、遠方に引き籠もりました。肉体的な痛みと共に、栄進的な痛みと不安がありました。この出産を、人々にどう説明すべきでしょうか。死んで、忘れ去られることを願っていたのです。しかし神意はそうではありませんでした。マルヤム様がある丘で、ナツメヤシの幹につかまり、痛みを苦しんでいる時、彼女を慰め、悲しみを癒し、冬を春へと替える、霊的な呼びかけがありました。「悲しんではならない。主はあなたの足もとに小川を創られた。またナツメヤシの幹を、あなたの方に揺り動かせ。新鮮な熟したナツメヤシの実が落ちてこよう。食べ且つ飲んで、あなたの目を冷やしなさい。」

クルアーンの章句が伝えるこのシーンの装飾として用いられる新鮮なナツメヤシと水は、今日、

理想的な出産施設のしるしを示しています。新鮮なナツメヤシも、水も、さらには水の音も、出産を容易にし、妊婦にとって安らげて楽な環境を作り出すものなのです。新鮮なナツメヤシは母乳の出をよくするという特質によっても知られています。

また、神聖な示唆として、マルヤム様には、人という時に「言葉断ち」をし、誰とも話さないことが教えられました。人々が彼女のところに来ていろいろと話し始めたので、マルヤム様は布にくるまれたイーサーを指さしました。そしてイーサー（アレイヒッサラム）も、次のように話したのです。「わたしは、本当にアッラーのしもべです。かれは啓典をわたしに与え、またわたしを預言者になさいました。またかれは、わたしが何処にいようととも祝福を与えます。また生命のある限り礼拝を捧げ、喜捨をするよう、わたしに御命じになりました。またわたしの母に孝養を尽くさせ、高慢な恵まれない者になされませんでした。またわたしの出生の日、死去の日、復活の日に、わたしの上に平安がありますように。」揺りかごで話したこともまた、一つの奇跡でした。

イーサーはそもそも、アッラーの一つの言葉でした。言葉は、赤ん坊の時すでに話したのです。

アッラーが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に、クルアーンで、独立した一つの章（マルヤム章）において、かつ、その他の章においてマルヤム様について語られていることにもまた、当然多くの英知と神秘が秘められています。

特に、ムハンマド（彼の上に平安あれ）が、偶像を崇拜し、イスラームを否定する人たちによって受けられた苦痛に対する慰めという観点で、マルヤム様の身におきた出来事が説かれていることは、非常に重要なのです。



### その3 タイガース・ファン

中学1年の時に訪問教育と一緒に勉強したWくんから、メールをもらいました。

彼は、心臓の病いで、移植しか治療の道がないということで、母親をはじめサポートしてくれる人々のおかげで、遠路カナダまで行き、無事移植手術を行い、日本に帰ってきたという頑張り屋さんです。

「死にたくないから、心臓移植してもらいたい」

訪問教育で学習しているときに、彼の口から出たことばです。

その時、彼の年齢では外国に行き、彼の年齢にあった提供者の出現を待つしかなかったのです。

どうして、日本では若年者の心臓移植が不可能なのでしょう？

脳死の基準が厳格すぎるとか、小さなわが子の死に嘆き悲しむ両親が、我が子の体を提供し、その体にメスを入れられることが耐えられないとか、いろいろな理由で今のところ日本では、15歳以上でないとい移植が受けられないという現実があります。

彼や、彼のお母さんから教えられた日本の心臓移植の現状は、諸外国に比べて、曖昧で、筋が通っていない医療政策の影響で、移植を待つ患者さん達の気持ちを考えた施策にはまだなっていないということでした。

そのために、ものすごいお金を準備して、かなりのリスクを背負って、日本を飛び出します。インターネットのサイトを見ても、たくさん子ども達が資金集めをしていることや、残念ながら適合者が現れるまで待ちきれなかった子ども達のことなど、この日本の施策のせいで流さなくてもいい涙を流している子ども達がたくさんいます。

私が単純に考えても、よその国で不幸にも子どもが亡くなり、その子かその子の両親の深い善意で、臓器を提供してもらっているという現実には、感謝してあまりあることなのでしょうが、日本の国の恥であるような気がします。

私が直接指導したわけではないのですが、何年前に同じ理由でアメリカに渡った中学生は、心臓移植の後、拒否反応が出て帰らぬ人になりました。無念な胸中を思うと、いたたまれない気持ちになります。

Wくんは、カナダにわたった後、提供者が現れるまで、一年近く待ち続け、とうとう希望を手に入れました。その時の、彼のお母さんからのメールで、「提供者である子どもの悲しみ、その両親の悲しみを思うと、胸が張り裂けそうです」という思いがつつられていました。

その彼が、人より若干遅れて、この春公立高校に合格しました。

メールには、こう書かれていました。

「タイガース、強いなあ、これから僕もタイガースを応援します」



最近家の掃除をしていたら、古いプリントが出てきてそれを読み返していました。そこには、アッラーが「あれ」と言ったらあり、「あるな」と言ったら無くなる。私たちの存在はアッラーが望んでいるからこそ存在するというような内容が書かれていました。

本当に忘れがちですが、私たちは心臓を故意に止めたり、動かしたりすることもできない無力な存在です。たとえば、あなたの余命は何ヶ月ですと告知されてもじゃあこうして自分で治そうか、ということも出来ません。ただなす術もなくアッラーのお助けを待つばかりです。

私たちの存在はアッラーの御手にあります。プリントを読んだ直後、自分の実生活の中でそれを実感する出来事があり、アッラーにすがることしか出来ない自分の無力さを痛感させられました。そんな時だけ一生懸命アッラーに助けを乞う自分に恥ずかしい限りです。アスタグフィルラー。常にアッラーに感謝し、アッラーに懺悔しなければと自分に言い聞かせました。私にとってイスラームの素晴らしいところは、いつもアッラーを念じなさい、ズィクル（賛美）しなさいとクルアーンに書かれていることです。他の信仰のことはあまり分かりませんが、たとえばアッラーと何回唱える、ラーイラーハイッラッラーと何回唱える等、ズィクル（賛美）の方法まで預言者様によってはっきりと示されている信仰はあまり無いのではないかと思います。困ったときの神頼みではありませんが、そういうときだけアッラーにおすがりすることが多いこの頃。

アッラーに感謝したいとき、赦しを願うとき、それらを行う御言葉がアッラーから預言者様を通じて「ある」ということのすばらしさをまた改めて感じました。

#### 購読者からのメッセージ

家庭のあり方は、子供達を真の信仰者に育てる上でとても大事です。私は結婚の機会に、イスラームを選んだ一人です。アル・ハムドゥリッラー、信仰を知り、知識を求め、毎日の実践に移していく中で、試行錯誤しながらも、素直にイスラームの教えに向かっている自分の基本は、アッラーによって、善き両親の間で育てていただいたからだ気がつきました。改宗したばかりの時は、自分が信仰に向かわなくてはならない中で、違う点ばかりが気になり、恥ずかしい事に、信仰を持たた自分の方が、両親よりも正しいというような高慢さすらあったのだと、振り返ります。イスラーム、他の宗教に対しても、構えてしまう両親ですが、正しい人間になるようにと、懸命に愛情を注いでくれたからこそ、今、ムスリマとなり、クルアーンを学ぼう、子供達にも学ばせよう、ムスリムの友人、つながりを持つての方とは、正しく接しよう、と意欲をだせる今の私があるのだと、感謝の思いです。

男女の差がどんどんなくなっていく風潮の中、育ってきた私達の世代は、「夫に従う」というのをどれほどわかっているのかと思います。今の私も、まだまだわかっていませんが、結婚した当初は本当にわかかっていませんでした。女性の仕事のチャンスが広がっている事の是非は今、問わないとして、夫が仕事をして、自分と、子供を養ってくれる事に感謝が足りず、自分は子供の世話で大変、仕事の方が楽だとすら思ってしまった時期がありました。夫に対して、「家事も育児もそこそこやっている私に、何の不満があるのですか？」というような偉そうな気持ちでいたら、どんなに上手に料理をしたり、家の片付けをこなした所で、自分がやった気になるだけで、アッラーから報酬をいただけるような、夫や子供に満足してもらえるような働きにはならないんだと気がつきました。

夫の仕事がうまくいかずに経済的に不安な時期もありました。外国人なのだから、日本の会社で働くにしても、自分で事業をやるにしても、日本人の男性より困難に決まっています。うまくいっているムスリムの男性が本当にすばらしいのであって、多少うまくいかないのは普通なんだとわかっていながらも、「こんなにお金に困るのなら、私が働くから、あなたは手守をして。」と言った事もありました。その事は夫より却下され、経済的には切羽詰った訳ですが、今、「却下されて良かった。アルハンドゥリッラー。」と思います。未熟だった私が、夫に子供を任せて、働いたとしたら、「私が夫も、子供も食べさせている」というようなますます偉そうな気持ちになっていたに決まっているからです。そんな中で子供が育ったとしても、いくらクルアーンを読んで、礼拝（サラート）を教えた所で、謙虚な心が育たなければ、意味がありません。

弥生



アスマ祖父をなだめる

アブ・バクルが、み使いのお供をしてメディナに移住するとき、み使いの路要に備えて手許にあるすべての金を持って行った。それはおよそ6千ダルハムであった。彼の出発後、父親アブ・クアハファは盲目で、当時まだイスラームを受け入れていなかった、自分の感情を孫娘に向かって露骨に訴えた。アスマは言っている。

祖父は、私どものところに来て言うのである。

お前たちのお父さんはメディナに飛んで、お前たちを驚かせ、彼の所有の金を一文も残さず持出し、私たちはこれから先一層の困難に陥ることになった。私は言った、いやおじいさん、心配はありません、お父さんはたくさんのお金を私どもに残しています。私は小石を集め父がつねに金を納めていた隅の方にいれその上を布で被い、祖父をそれにつれて行き布に祖父の手を触れさせた。祖父はそこにダルハムが一杯だと考え、前たちの暮らしに何かを残しておればそれでよい。

アッラーによって申します。父はわたしどものために、実は1ダルハムも残していませんでした。これは、一時祖父をなだめるための奇計でした。

この大胆なムスリム婦人を見よ。実際には、彼女は祖父よりもっとなだめを必要としていた。普通ならば彼女らに対し同情援助の手を差し伸べる者は誰もいないのだから、祖父に対し泣きつき同情を哀願するべきである。しかしアッラーは、当時のムスリムの男女に対し、かくもけたはずれの偉大な心の枠を授けたまい、日常万事を処理し得たことは羨望にたえない。タブク遠征のおり、アブ・バクルは所有物の総てを放出してしまったことは第6章に紹介した。み使いはあるとき言った。

アブ・バクルの財産ほど、私に頼りになるものはない。アブ・バクルを除き、善行を受けた人総てにたいし、私はすでに払い戻してしまった。彼に対しては別にアッラーから払い戻しがあるだろう。

購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

三井住友銀行 店番号： 005（春日部） 口座番号： 7315959 口座名義： Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> [info@yasuragiweb.com](mailto:info@yasuragiweb.com) [yasuragi\\_nihon@hotmail.com](mailto:yasuragi_nihon@hotmail.com)

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部